

二〇二三年八月十三日 NHK総合テレビ ニュース番組で、戦中(昭和十八年)に制作された「東山動物園 猛獣画廊壁画」(太田三郎、水谷清、宮本三郎画/現在名古屋市美術館所蔵)の公開(二〇一八年十一月)と今後の修復・再度公開について報じられた。——以下、同美術館のホームページに掲載された写真、解説文を引用した。春陽会の年史への再記録、報道については同美術館の許諾が必要。

(名古屋美術館 ホームページ、「壁画修復プロジェクト」から)

「東山動物園猛獣画廊壁画」

第二次世界大戦前、一九四三年発行の『東山動物園要覧』では、東山動物園に二百九十一種一千百四十二点の動物が飼育されていたことが記録されています。しかし、戦時中に軍の指示で処分されたり、食料不足や暖房不足から動物の数は激減し、終戦時には、主だった動物としてはゾウ二頭、チンパンジー一頭、マナヅル、オオヅルをはじめ鳥類十二種のみでした。

終戦の翌年、一九四六年三月十七日に動物園は数少ない動物とともに再開しました。しかし、動物園に来て、子どもたちがライオン、ヒョウ、カバといった動物を見ることができませんでした。東山動物園の当時の北王園長は「これでは子供たちがあんまり可哀そうです。いまのままでは子供たちは三十年から五十年、こと動物に関する限り知識と興味からおくれています」と嘆いていました。このことを憂慮した地元の中京新聞社が、一九四八年に提唱し、猛獣画が制作されることになりました。空いて

いた当時のカバ舎を猛獣画廊と名付け、その壁の大きさに合わせて壁画が計画され、「北極・南極」「南方熱帯」「アフリカ」の三作品に分けて描かれることになりました。



【上・太田三郎「北極・南極」、中・水谷清「南方熱帯」、下・宮本三郎「アフリカ」。
ともに一九四八年作 油彩・キャンバス 一四一×五四〇cm】

壁画を描くことになったのは当代一流の画家三名、一九四八年十月二日の記事では「光風会の太田三郎氏、春陽会の水谷清氏、第二紀会の宮本三郎氏」と紹介しています。太田三郎は愛知県の出身で、中部日本美術協会の委員長として活躍し、水谷清は岐阜県出身で、中部春陽会の結成に尽力しており、いずれも当時は名古屋在住でした。宮本三郎は石川県出身で、前年には第二紀会結成に参加するなど活躍をみせていました。記事には誰がどの絵を描くかは抽選で決まり、キャンヴァスと絵具も新聞社が手配、そして十月半ばには下絵が完成し、十一月上旬に完成・お披露目という計画が伝えられています。

その後、動物園では動物の飼育数が回復し、猛獣画廊壁画は役割を終えました。が、正確な閉廊の日付はわかっていません。壁画は一時期、名古屋市中区にあった名古屋観光会館に移されました。同会館が閉館になる際に廃棄の方針となりましたが、名古屋市美術館が保管することを決め、一九九七年に収蔵されました。

戦後の荒廃した時期に、子どもたちのためにと制作された本壁画は、戦いのもたらす悲惨さ、社会と美術の結びつき、そして名古屋の歴史を伝える貴重な文化遺産です。



【上・壁画制作の様子／下・壁画公開の様子。

提供：名古屋市東山動植物園】

「制作にあたっての画家の言葉」

(『中京新聞』 一九四八年十月二日付)

太田三郎——「中京新聞のこの企ては地方文化の自主性樹立を志して名古屋へ居を移した私にとってことに意義が深い。今日のこの郷土の荒涼とした生活環境へこれによって何ものかを贈ることが出来れば限りない喜びである。併せてはこれが芸術と科学との醇化、科学が芸術の光被によって大衆の心奥に浸透する効果、といったようなものについての試金石の一つともなれば一層の喜びである。私のタラン「才能」が果たしてそれに副いうるかどうかは頗る心許ないが、最善をつくして折角の企図からヴァリュウ「価値」を減じないように努めよう。」

水谷清——「動物画廊は現代の日本では子供のためには是非とも緊急にやらなければならない仕事だと思つて引受けた。わが国ではじめての試みだから引受けてさでどうとわれわれにも見通しはつかない。むしろ時代に逆行したパノラマ風な画面をどう現代に生かすか……むづかしく考えれば手がでない。私としては美術的な角度を失わないで南方熱帯の雰囲気と科学的な猛獣どもの生態を可愛い子供たちに楽しく伝えることに重点をおいて仕事を進めたいと思う。」

宮本三郎——「私がこんど委嘱されて失われた動物たちの画像を描きあげることは甚だ愉しいことであります。日本の小国民たちが将来世界人として生きてゆく上からもこの動物との接触に深い意義を感じさせられます。私どもの絵が、彼ら動物の自然なままの生態を伝えることに役立ち、その理解への手引きとなればと思います。飼われた動物と野生の動物には大きな相違があり、その復原に全力をつくしたいと思ひます。」

「2018年11月20日」火 動物園長のZoom「LIVE」

先日、名古屋美術館(中区伏見)開館三十周年を記念したベストセレクション展に行ってきました。同展で初公開されている「東山動物園猛獣画廊壁画」を見るためです。この壁画は三枚の油彩画で、動物が少なくなった戦後の東山動物園に数年間だけ飾られました。現在は、名古屋市美術館が所蔵しており、特別展示で11月25日まで公開しています。

実物の壁画を見るのは今回がはじめてです。作品は「北極・南極」「熱帯雨林」「アフリカ」とモチーフが3つに分かれていて、各地域に生息する動物が細かく描かれています。どの作品も、野生動物の生命力や躍動感が見る側に伝わってきます。縦1.4m、横5.4mという巨大キャンパス画ならではの迫力です。

作家はそれぞれ中部を代表する3人の画家がそれぞれを担当して描きました。実際にモデルとなる動物がいないので、描くのに相当苦労されたのではないかと想像しています。それでも、本物の動物が見たいという子供たちの夢や、再び本物を見てみたいという大人の想いを少しでも癒したいという気持ちで創作されたのだと思います。

東山動物園で公開されたのは、ちょうど70年前の今月になります。秋の深まる頃で、現在のカバ舎プールに映る紅葉は当時も同じですが、本物の動物のいる現在は、幸い動物壁画を飾る必要はありません。戦争の影響により本物が見られなかった時代の歴史的な事実を改めて認識し、市民のために貴重な美術作品を残された当時の芸術家の気概に敬意を表したいと思います。

昭和 23 年（1948 年） （太田三郎、水谷清、宮本三郎画）「猛獣壁画」名古屋市、東山動物園